

# ホタルニュースレター

日本ホタルの会 2022/8 第 95 号

## 矢島稔名誉会長 追悼特集

日本ホタルの会名誉会長の矢島稔先生におかれましては、2022年（令和4年）4月26日に肺炎のため、ご逝去なされました。享年91歳でした。ご冥福をお祈りすると共に、当会の発足と発展へのご貢献に感謝申し上げ、本号を追悼特集と致しました。



### 第一回日本ホタルの会シンポジウム

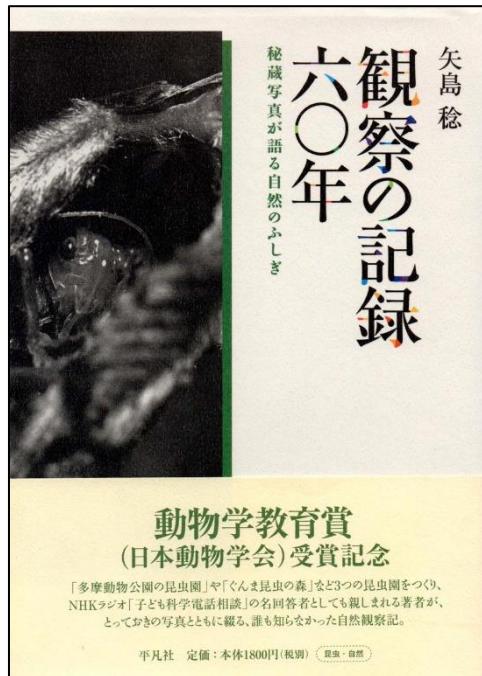
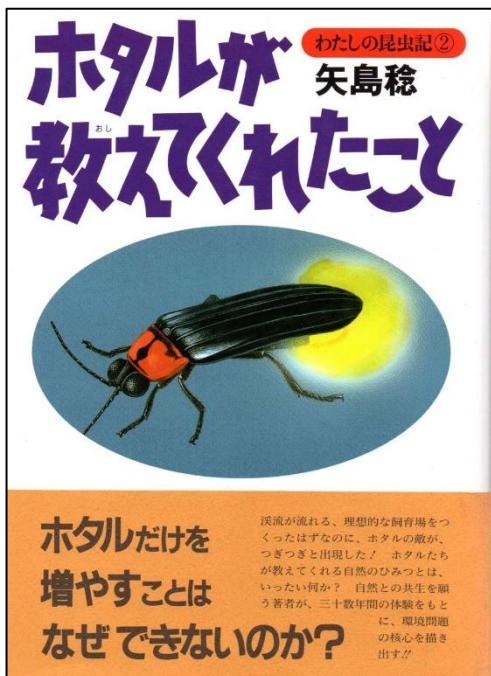
(1992年10月12日 経団連ホール)

#### ご経歴

- 1930年 東京 中野に生まれる
- 1957年 東京学芸大学 卒業、豊島園 主任研究員
- 1960年 多摩動物公園
- 1978年 上野動物園水族館 館長
- 1987年 多摩動物公園 園長
- 1990年 多摩動物公園園長 定年退職
- 1991年 東京動物園協会 常任理事
- 1992年 日本ホタルの会発足 副会長**
- 1997年 東京動物園協会 理事長
- 1999年 日本ホタルの会 会長、群馬県立ぐんま昆虫の森 園長、東京動物園協会 顧問**
- 2006年 日本ホタルの会 名誉会長**
- 2013年 群馬県立ぐんま昆虫の森 名誉園長
- 2022年 永眠

## 主な著書

- 1998年 わたしの昆虫記シリーズ1 「黒いトノサマバッタ」偕成社  
2000年 わたしの昆虫記シリーズ2 「ホタルが教えてくれたこと」偕成社  
2001年 わたしの昆虫記シリーズ3 「チョウとガの不思議な世界」偕成社  
2005年 わたしの昆虫記シリーズ4 「樹液をめぐる昆虫たち」偕成社  
2007年 わたしの昆虫記シリーズ5 「心にひびけカンタンの声」偕成社  
2008年 わたしの昆虫記シリーズ6 「ハチのふしきとアリのなぞ」偕成社  
2012年 「日本の昆虫館」東海大学出版会  
2014年 「観察の記録六〇年」平凡社



数ある著書の中から最近のものをリストとして挙げました。

「黒いトノサマバッタ」では、多摩動物公園の昆虫生態園でバッタを高密度で大量に飼育をしていく中で、トノサマバッタでも体色が緑色から黒色へと置き換わる相変異が起こることを発見する経緯やバッタにまつわる大移動、駆除、オスがメスを追いかけることを利用したバッタ釣りの話などが盛り込まれています。本書で小学館児童出版文化賞、産経児童出版文化賞、理想教育財団賞を受賞されています。

「ホタルが教えてくれたこと」では、ホタルの形態、生態、発光の生理の他に、ホタルのすみかとしての条件や自然界の食物連鎖網、飼育の大切さとその限界、ホタルを守るということはどういうことなのかをご自身の体験を通して記しています。あとがきでは、日本ホタルの会での取り組みにも触れ、ホタルの保護と回復の活動は川そのものの環境問題であり、人間自身の問題でもあることを指摘されています。

「日本の昆虫館」では、明治期の水族館と昆虫館、戦前と戦後の昆虫館、豊島園の昆虫館（死んだ昆虫標本を見せるのではなく、生きたまま間近で見ることができるように飼育展示する）、多摩動物公園での昆虫園、昆虫生態園設立のいきさつ、ホタルへの挑戦と皇居での取り組み、そして、現代の昆虫園の在り方としての、ぐんま昆虫の森の設立につながります。

「観察の記録六〇年」は、2013年度日本動物学会 動物学教育賞の受賞記念として編集され、受賞を祝う会の出席者にお送り頂きました。受賞には次のような背景があったかと思います。国内で初めて生態展示を導入し、豊島園、多摩動物公園、ぐんま昆虫の森と3施設での生態展示の昆虫館を創設したこと、ラジオ番組の「夏休みこども科学電話相談室」のメンバーとして30年以上にわたり活躍され、子供目線になって子供が納得できるように導く話し方で、子供たちの生き物への好奇心をかきたてたこと、また、「ホタルが教えてくれたこと」を始めとするわたしの昆虫記シリーズでは、子供向けであっても、学術的な興味の喚起だけではなく、自分たちの人間活動の環境への影響についても導いています。これらの影響を受けて、生き物に関する業界に進んだ多くの若者がいたのではないでしょうか。本書で使われている写真は、これまで撮りためたものとあります。公務員の立場とし、写真をエージェントには出さず、自分の意思で自分の出す出版物以外に使うことはなかったようです。動物園



日本動物学会動物学教育賞 受賞を祝う会

(2014年1月24日 上野精養軒、左から荻野前理事、矢島名誉会長、本多会長、川村理事)

や昆虫園のスタッフであったからこそ撮れた写真がたくさんあり、日本動物学会の動物学教育賞の受賞を機に、若い人への資料として刊行することにしたと、まえがきで記しています。

## 偲ぶ会

「矢島稔さんを偲ぶ会」が、2022年6月19日、神田神保町の日本出版クラブにて開催されました。群馬県立ぐんま昆虫の森の筒井学さんが発起人となり、70名ほどの方々がお集まりになりました。会場には遺影が飾られ、ビデオ映像も流れていました。矢島先生と所縁の深かった方々からのお話と歓談の後に、お一人ずつ献花台に花を添えて散会となりました。



### 矢島稔さんを偲ぶ会

(2022年6月19日 神田神保町 日本出版クラブ)

(編集事務局 鈴木浩文)

## 矢島稔名誉会長を偲んで

### 日本ホタルの会 会長 本多和彦

日本ホタルの会前会長で、名誉会長を務めていた矢島稔先生が、2022年4月26日に逝去されました。矢島先生は、日本ホタルの会発足に尽力され、日高敏隆初代会長退任後、当会会長に就任され長きにわたり、身近な自然の保全やホタル保全に係る指導、啓発に力を注ぐとともに、私たちを力強く導いてくださいました。

本ニュースレターを矢島稔先生追悼特別号とし、関係の皆様から矢島先生の功績、思い出などを伝えていただきたいと思います。

さて、私は、矢島先生が、ぐんま昆虫の森園長に就任され、その業務に専念されるとのことから、会長に指名され、以降現在まで会長を務めてまいりました。

もとより、日高前々会長、矢島前会長と比べることもできない、浅学非才の人間なので、ひたすら実務に徹し矢島先生の教えを伝え続けることに専念してきた次第です。

ですので、矢島先生の研究や業績に関する紹介は他の方にお譲りし、私からは矢島先生との楽しい思い出について、お話しさせていただこうと思います。

1995 年の夏前ころ、何の折だったか記憶にありませんが、先生から「実はね、今度近畿日本ツーリストで“ドクトル・ムッシーの動物園の楽しみ方講座”っていうのをやるんだけど、人が集まってないようなんだよ。誰か行かないかなあ」という話があり、雑談でよく聞いてみるとシンガポールに行くツアーとのことでした。1995 年といいますと、会の運営を広告代理店に委託していて、東京以外の場所でもシンポジウムなどを開催していた時期で、矢島先生が副会長、私は事務局の手伝いと会計を担当していたと思いますが、その頃は、それほど先生と接点があったということではありませんでした。それでも、私は、当時港湾の仕事をしていて、海外旅行の経験はなかったのですが、世界第 2 位（当時）の大港湾も見てみたいと思い、「行く人が少ないなら、家族で行きますよ」と参加することにしました。

そして、1995 年 8 月 27 日夕刻、ドクトル・ムッシーが添乗する 5 日間の「いきもの大好きツアー」が始まりました。深夜に到着して、翌日は、お仕着せの市内観光でしたが、コースの中にシンガポール植物園があり、博学な先生ですので、植物についても様々な面白いお話を聞かせていただきました。この観光で最年少参加だった 6 歳の次男もすっかり矢島先生になついてしまったのを思い出します。翌日は、さすがドクトル・ムッシーの動物園の楽しみ方講座だけあって、1 日中シンガポール動物園で、象に乗せてもらったり、少しだけ裏側も見せていただけたりしました。夕刻からは、当時から有名だったナイトサファリを堪能させていただきました。1 日中動物園で飽きないのかと思われるかもしれません、そこは矢島先生の尽きることのない知識いっぱいのお話で、「へー、なるほどね！」の連続で、へとへとになりましたが充実した 1 日で、後にも先にもこんなに動物園三昧の記憶はありません。3 日目は、セントーサ島の観光でしたが、行く場所は昆虫園と水族館、「どれだけいきもの好きなんだ！」というところですが、いきものが大好きな矢島先生と生きもの大好きな参加者なので、この日も先生の豊富な知識と楽しい話術で、あっという間の一日になったことは言うまでもありません。その日の深夜の便で帰途につき、生物とシンガポールグルメを満喫した旅も終わりました。



ツアー中、家族ぐるみで矢島先生と親しくさせていただき、「本多さん、またこういうツアーにみんなで行きたいね」とおっしゃってくださいましたが、その機会に恵まれることはませんでした。本当に残念です。ご一緒させていただいた子供たちも30歳を過ぎ、すっかり大人になりましたが、あの旅は忘れられない思い出となっています。

今、こうして思い起こすと、矢島先生の穏やかな人柄と豊富な知識、生きものへの尽きぬ愛情が思い出され、もう一度、矢島先生のうんちくを聞く旅ができればと心から思います。

次の世界へ旅立たれた矢島先生は、どこかで虫や動物と出会い、楽しいお話をしているのかもしれません。

矢島稔先生のご逝去に際し、これまでいただきましたご指導とご厚誼に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

## 僕

### 日本ホタルの会 前理事 荻野 昭

多摩動物公園で、最初に手掛けた昆虫はスズムシでした。冷蔵庫と恒温器を使用して卵を早く遅く孵化させ、正月に鳴き声（姿）を展示する事でした。その後カントン、ナナフシ、ガムシ、カブトムシ、タガメ、ホタル等の飼育を経験し、開園30周年の1988年に昆虫生態園がオープンしました。

ところで私は、特に昆虫に興味を持っていませんでした。そんな私と昆虫を引き合わせてくれたのが、矢島さんでした。高校を卒業して就職した遊園地（豊島園）の昆虫館に配属されました。矢島夫妻との出会いです。昆虫館は陸槽（テラリウム）をたくさん並べその中に植物を植え、生きた昆虫を種類ごとに飼うのです。飼育展示だけでなく、採集網に胴乱（植物の収納）を肩に野外に出て、昆虫の採取と名前調べ、食草の採集と覚える事ばかりです。このように実物を触り、名を知り、生活を教示され、昆虫の不思議な世界に、のめり込んでしまったのです。昆虫にめぐり会ってから1年後、矢島さんとの別れがやってきました。1961年矢島さんは遊園地を退職し、多摩動物公園へ移りました。矢島さんのいない昆虫館なんてー。「大きな昆虫館を建て、昆虫の魅力を子供たちに知らせてやりたい。」矢島さんの言葉に心を揺さぶられ、1年後に身分不安定のアルバイトで矢島さんの後を追ったのです。多摩動物公園の昆虫園で、働き始めた20歳の青年は40年後定年退職しました。そして出生地で自然に勤しんでいましたところに悲報です。山口県への螢採集、皇居、奥多摩町へのホタル幼虫放飼、シンガポールへの出張旅行など様々な思い出が、走馬灯のように思い出されました。

冒頭の『僕（ぎょうこう）』は、偶然、思いがけない巡り会いのことです。矢島さんとの出会いは、まさに僕以外の何ものでもありません。長年にわたってのご指導ありがとうございました。

昆虫の啓蒙普及活動に、多大な貢献をされた矢島さんご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

2022年6月 萩野昭 前理事 撮影。実相院は真言宗豊山派の寺院で矢島氏の開基とされています。実相院のホームページとウィキペディアによりますと、新田六郎左衛門正義の三男、矢島三郎信氏のご子孫は宗良親王に奉じて、南朝方として北朝方の室町幕府と戦っていましたが、敗北を喫し、沼袋に建立したのが起源とされています。現在でも矢島姓を名乗る檀信徒が半数以上を占め、矢島寺とも呼ばれています。戒名は「聚螢院蝶夢豊稔居士」です。



東京都中野区沼袋の実相院（矢島寺）にある墓石と戒名

## 矢島先生を偲んで

日本ホタルの会 理事 古河義仁

新型コロナウイルスの感染が拡大してからはご無沙汰しておりましたが、今年の5月11日のNHKのWebニュースで訃報を目にし、ショックを受けました。

私は東京都江戸川区の生まれですが、8歳の時に千葉県松戸市に移り住みました。かつての自宅周辺は、たんぽや雑木林が多くあり、ホタルをはじめ、カブトムシやクワガタなど多くの昆虫が棲んでおり、昆虫少年としての生活が始まりました。

中学生になった時に多摩動物公園昆虫愛好会に入会し、定期的に行われる昆虫観察会に参加しました。矢島先生との出会いであります。観察会を通じ、フィールドでの観察の楽しさや重要性を教えて頂きました。

その頃、オリンパス OM-2 という一眼レフを買い、昆虫の写真を撮り始めましたが、このきっかけとなったのは 1975 年に出版された「小さな知恵者たち—昆虫の決定的瞬間」という写真集で、著者は勿論、矢島先生で写真もすべてご自身がお撮りになられたものばかりでした。

写真集の副題にあるように、単なる図鑑ではなく、まさしく昆虫の生態写真で、オオムラサキが羽化する瞬間を収めた写真が表紙になっています。ゲンジボタルの幼虫が上陸しているところや、土まゆの中で丸くなっている様子の写真もあり、生態の各シーンを写真と言う記録に残すことの重要性を教えてくれました。

私は当時、ヘイケボタルの飼育方法を確立し、様々な観察をしておりました。その結果を「ヘイケボタルの研究」と題して多摩動物公園昆虫愛好会の会誌「インセクタリウム」に投稿したところ採用され、その年に東京動物園協会より奨励賞を頂き、矢島先生から観察の方法や注意点など細かくご指導頂きました。

大学は農学部に進みましたが、昆虫を専門とする道には進まず、一般企業に就職。しかしながら、ホタルの研究は趣味として続けており、パソコンとインターネットの普及に伴って東京ゲンジボタル研究所として活動をはじめ、同時に矢島先生が会長であった「日本ホタルの会」の会員にもなりました。2006 年には、矢島先生が私を理事に推薦してくださり、日本ホタルの会のホームページを担当させて頂くこととなりました。

その後、私の著書「ホタル百科」を群馬昆虫の森に置いてくださったり、私がテレビ東京に出演した際に、スタジオでの解説の出演を快諾してくださったこともあります。また、私と、ある施設との確執によって多大なご迷惑をお掛けしたこともありました。思い出は尽きません。

昆虫少年を育て、生態観察の重要性を教えてくださった矢島先生。そして「ホタルは里山環境の結晶」であるという共通理念のもとに一緒に活動できましたことを、とても光栄に思っております。今後も、その理念を引き継いで活動して参ります。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 日本ホタルの会 矢島先生追悼原稿

群馬県立ぐんま昆虫の森 昆虫企画係 係長 筒井 学

群馬県立ぐんま昆虫の森の名誉園長であり、日本ホタルの会名誉会長であった矢島稔先生が、令和4年4月26日にご逝去されました。長きに渡り昆虫界を牽引されてこられた矢島先生を偲び投稿させていただきます。

矢島先生のご活躍は、私が説明をするに及びませんが、ラジオの昆虫相談での優しさとユーモアにあふれる名回答は、まさに矢島先生の気さくな人柄を表したものでした。

また、現役時は東京動物園協会に席を置き、多摩動物公園に昆虫園を開設し(1961年)，その後着々と規模を拡大し、1988年には巨大なチョウ温室を有した昆虫生態園を建設する大事業を達成されました。大きな組織の中で着実に経験を積み上げ、行政を動かすことで理想の文化を築くということにおいても、並外れた力を持っていたと感じます。その後、チョウの温室を併設した昆虫館が各地で建設され、日本に昆虫館という新たな文化施設の潮流をもたらし、礎を築き上げました。そして、さらなる昆虫施設の理想型を求め、自然体験ができる里山環境が併設された昆虫館として「ぐんま昆虫の森」を創設されました。私は、ぐんま昆虫の森の建設準備から矢島先生とご一緒させていただき、22年間を共に歩ませていただきました。

私なりに矢島先生の活動を傍らで見る中で、一貫性を感じるのが自然教育へのこだわりでした。今時の学校現場のおかれた現状に触れ、「実体験なくして理科教育は成り立たない」と力説し、いかに現実の自然に触れ、実物の昆虫を見て観察するということの重要性を唱え続けておられました。

温暖化や異常気象が問題化する近年、ようやく環境問題への関心が高まりつつある世相のようにも感じますが、幼少期に自然に触れない子供たちが大人となり、自然と閉ざされた社会で生活する中で、どこまで環境問題に真剣に取り組めるでしょうか。地球の上で生き、自然の中で生きているという実感と現実認識、自然環境への強い関心が持てる人を育てていかなければ社会は変わっていかない。矢島先生は、人の感性を育てる場所として、ぐんま昆虫の森を創設されました。まさに矢島先生の人生の集大成であったと感じます。

ぐんま昆虫の森が開園後、矢島先生自らが子供たちの質問に答えるプログラム「昆虫おもしろ講座」を立ち上げて、月に数回ほど開催していました。冒頭では

スライドを交えながら季節感のある昆虫をテーマにお話をされていましたが、その話題の多さと、実際にその虫と対峙した内容は、いかに矢島先生が多くの昆虫たちと接し、疑問を解き明かそうとしてきたかがうかがえ、生態学者としての一面を感じました。その講座も体調を崩されて中断となった2019年8月までに累計493回に達していて、2801件の子供たちの質問に答え続けてきました。生涯現役として啓蒙活動にいそしめたことを物語ります。「私は生涯、昆虫の受付係」とおっしゃっていたことが印象に残ります。

私は矢島先生のご逝去を受け、あらためてその生き方、考え方、軌跡を振り返ることにし、数々の著書を読み返しています。フレーベル館の「虫に出会えてよかったです」では、幼少期の戦争体験のこと、そして、昆虫への興味と指導者との出会いという運命の中で矢島先生の人生があつたことが改めて感じられる作品です。また、偕成社の「私の研究シリーズ」では、「ホタルが教えてくれたこと」をはじめ、矢島先生の仕事への情熱と、昆虫への好奇心が感じ取れる作品群です。様々な虫たちへの疑問と、それを確かめる観察と実験の積み重ねを豊かな文章表現で描いています。改めて皆さんにも一読いただければ、矢島先生の虫に対する愛と、啓蒙にかけた情熱が伝わるのではないかと思います。

「ホタル」というテーマに関して矢島先生は並々ならぬ情熱を注がれていたことは言うまでもありません。それは、自然の不快な部分は排除し、都合のよいことだけ求める一般社会の自然観に対するアンチテーゼとして、「ホタル」は象徴的な存在であったからでしょう。川筋を光る一匹のホタルをたとえとして、カワニナの捕食数を調べ、そしてカワニナの生きる背景と双方の天敵。このほどに説得力のある自然の構図の解説は、矢島先生が自ら調べたことによる研究成果だからです。ホタルをとおして自然とはなにか、人間は自然とどう向き合うべきかを伝え続けたことは矢島先生の大きな功績のひとつと感じます。

晩年の矢島先生は、生涯の研究テーマ「フユシャク」への情熱は冷めぬままで、メスの翅はなぜ退化したかという疑問に、体温との関係性という仮説の立証に夢中でした。サーモグラフィーの精度が発達し、昆虫の体温が測れるという機械を購入して、時間毎のオスとメスの体温と行動を記録する研究にいそしんでいました。また、1958年に武藏野市の雑木林で発見したカバシタムクゲエダシャクのメスのことがとても印象深かったようで、折に触れてこの話をうれしそうに語っておられました。そんなカバシタムクゲエダシャクの再発見が近年の蛾類界の話題となりましたが、私もその幼虫を飼育する機会が訪れ、羽化したら矢島先生にお見せしたいと思っていた矢先の訃報となり、無念の思いです。

---

---

私にとって恩師であり、昆虫界のみならず、文化人として多大な功績を残された矢島先生のご冥福を心よりお祈りしつつ、残された私たちが、矢島先生が築かれた世界をしっかりと継承していくかなければならない責任を感じずにはいられません。

## 叶えたい先生の最後の夢

日野の自然を守る会 森川正昭

日野市にある「日野の自然を守る会」の会員の森川正昭と申します。私は「日本ホタルの会」の会員ではないのですが、矢島稔先生が、守る会の創立(1972年)以来の会員であることから、多少、お付き合いをさせて頂いたことがあったからでしょう、鈴木浩文様から執筆依頼のお話しを頂き、書かせて頂きました。

私が先生に最初にお会いしたのは、1964年の夏、私が高校2年の時でした。当時、京浜昆虫同好会という虫好きの集まりの同好会に入っていました。先生も、その中枢として活躍をされており、私と兄と、兄の友人の3人で多摩動物公園にお勤めの先生を訪ねたのです。その時、先生は34歳、当時すでにホタルの研究をされていたのでしょう。ホタルの発光する原理、ルシフェリンや酵素ルシフェラーゼのお話をして頂きました。しかし、その後、先生との交流はありませんでした。再会したのは現役を終え、日野の自然を守る会に入会してからでした。2008年2月に日野市で「日野の自然史」のシンポジウムがあり、その中で、私が市内の蝶の話をしました。その時、先生もお見えになり、実に、44年ぶりの再会です。もちろん私のこと等覚えてはおりません。それから、お付き合いが始まったのです。

一番の思い出は2018年7月18日の先生の誕生日、米寿のお祝いに、先生の高校生時代からの友人、東京学芸大学の名誉教授の北野日出男先生と招かれて、浅草のご自宅に伺った時です。暑い日でした。まず、浅草の街を案内して下さいました。浅草は日本の昆虫館の発祥地です。そこは明治30年代に木馬館があった場所で、ここに昆虫館があったと説明して下さいました。先生は先ずこの場所を案内したかったのです。そして、ご自宅に招かれ、奥様に出て頂いたアイスクリームの美味しかったこと。更には、近くのうなぎ屋で美味しいウナギをご馳走に

なり、恩師・古川晴男先生の事、多摩動物公園での昔の思い出を話され、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

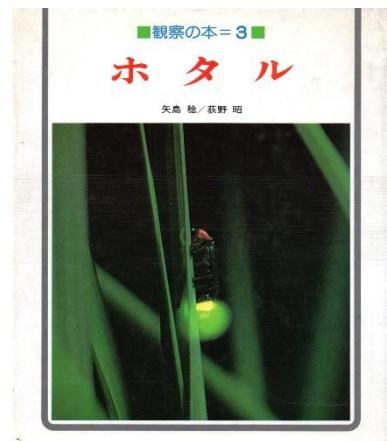
そして、最後の思い出は、先生の最後の仕事、最後の夢である東京都に自然史博物館を創る仕事、夢のお手伝いをしたことです。ご承知の通り、東京には都立自然史博物館がありません。かつて高尾山の麓にあつた高尾自然科学博物館が閉鎖されて13年が経過していました。先生は、それ以上の博物館設立の夢があったのです。守る会では、会員の皆様に設立要望の署名をお願いし1,537名の方々から署名を頂き、その署名簿を持ち何度か都庁にも足を運びました。そして、いよいよ、その動きが始まった矢先に、コロナ騒ぎが起きたのです。あれから5年が経過しました。先日、東京都の担当者から、ここで博物館検討の予算が付いたとの連絡がありました。

先生が残された大きな仕事、皇居にホタルを定着させた事、多摩動物公園の昆虫生態園の建設、ぐんま昆虫の森の開園、そして最後の仕事、都立自然史博物館設立の夢は、まだ道半ばではありますが、是非叶えて上げたい。今、改めて願うのです。矢島稔先生のご冥福を心からお祈り致します。

## 矢島稔先生を偲んで

日本ホタルの会 副会長 鈴木浩文

矢島先生との最初の出会いは、本からでした。偕成社の「ホタル」という本で、矢島先生と荻野先生の共著によるものです。その本を購入した1980年当時、私は大学受験に失敗して、仙台の予備校に通っていました。仙台では、友人に自転車を借りて、七北田の田んぼにヘイケボタルを取りに行っていました。その後、実際にお会いするのは日本ホタルの会の第一回シンポジウムでした。先生も当時は日野市にお住まいでしたので、シンポジウムや会合の後は、しばしば、JRの豊田駅から一緒に歩いて帰ったものでした。



日本ホタルの会では、発足当初、事務局をイベント会社内に置いていましたが、渋谷に独自の事務所を構えることになりました。会長が日高敏隆先生、副会長が矢島先生、常任理事が大場信義先生と有名どころが名を連ねるなか、各省庁との連絡やマスコミ、企業などからの問い合わせに対応するため、事務局員を常駐させることになったのです。当初は財団法人化を考えて、各先生方がご奮闘されたわけですが、その後、環境問題に対する社会情勢も変わり、会の体制と方向性も大きく変わることになります。

矢島先生が会長に就任され、ある日、先生からご自宅に招かれ、多少お酒を飲みながら、事務局を担当して欲しい旨のお願いを受けました。これまでの行政や企業向けの対応から会員向けの対応に方向修正して、野外での観察会と文化人交流の場としてのサロンのような談話会を実施したいということでした。事務所も京王線の代田橋駅近くの出版関係の事務所を間借りすることになり、会則や会費などを見直し、今の体制（ニュースレター、シンポジウム、観察会、談話会）が出来上がっていきました。

またある時は、JR日野駅付近の食事処に呼び出されたこともあります。皇居のゲンジボタルの遺伝子分析をお願いしたいとのことでした。皇居での取り組みについては、「ホタルが教えてくれたこと」や「日本の昆虫館」などに記されていますし、本ニュースレターでも掲載しています。定着までの取り組みを成し遂げたなかで、皇居のゲンジボタルの由来についても気にされていたことと思います。分析結果は矢島先生を通して平成天皇にご報告されたとのことで、私としても大変光栄なことになりました。

その後、ぐんま昆虫の森でのお仕事がお忙しくなり、会長職を辞されて、名誉会長になって頂きました。お住まいも日野から台東区の雷門に転居されました。長年住まわれた日野市東豊田については、「観察の記録六〇年」においても、変わりゆく自然として第一章で触れられています。豊田から南平方向の定点写真が1959年（昭和34年）、1963年（昭和38年）、1974年（昭和49年）、2013年



渋谷の事務所開き

（1996年11月24日、日高先生と矢島先生）

(平成 25 年) の風景として載っています。その中からの部分的な抜粋ですが、「豊田とは名ばかりの都市に変わってしまい、少し前までの風景は想像もできない状態になった。もはや観察できる場所はなくなったので、平成になってからは行かなくなつた。」とあります。ここ数年でも、東豊田-川辺堀之内地区は、国道



**東豊田に残された田んぼ** (2022 年 7 月 17 日)



### **旧矢島邸前の道路から南平の方向を臨む**

(2022 年 7 月 17 日, 山の向こうが多摩動物公園)

20 号線日野バイパスの延長、都市計画道路日野線の整備などにより大きく様変わりしましたが、ごく一部には、まだ田んぼが残っています。

先の著作には 1959 年（昭和 34 年）からの南平方向の写真が載っており、ちょうど、多摩動物公園にお勤めの頃からになります。南平の山の向こうは多摩動物公園のアフリカ園あたりになります。この風景を見ながら数多くの著作にあたられたことと思います。60 年の経過後、風景は大きく変わってしまいましたが、市民とっては、緑の残る住みやすい街になっています。矢島先生の旧邸宅前の道路から、この南平の方向を臨み、先生のご冥福をお祈り致します。

## 事務局からのお知らせ

### 談話会の報告

2022年6月11日（土）にリモートでの談話会を開催しました。演者は会員の板垣和生さん（東京都福生市）で、「ホタルと共に生きる学び舎」と題して話題を提供して頂きました。内容は、福生市立第七小学校でのコミュニティ・スクール活動で、ニュースレター94号に掲載されておりますので、そちらをご参照ください。

### 観察会の報告

コロナ禍のなか、2年連続で現地での観察会を見合わせておりましたが、2022年7月23日（土）に富士山山麓（静岡県富士見市）でヒメボタルの観察会を行いました。まず、道の駅「すばしり」に集合し、ホタル観察のレクチャーを行い、夕食後に現地に向かいました。30名ほどの参加で、写真撮影講習会も開催されました。



観察会 写真撮影講習の様子

\*\*\*\*\*

ホタルのニュースレター（第95号）

2022年8月25日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒239-0824 神奈川県横須賀市西浦賀4-11-2-404

本多方（日本ホタルの会事務局）



日本ホタルの会  
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

e-mail: hotarunokaijimukyoku@gmail.com

ホームページ: <https://www.nihon-hotaru.com>

Facebook: <https://m.facebook.com/nihonhotaru>

印刷 青森コロニー印刷 東京都中野区江原町2-6-2